



中村俊定文庫
文庫 18
709
2



孟村

俳諧發句名家類題

秋之部

七月
立秋

七月や小ふな澄きよ灯れも秋

園史

まろしきのみとてさうらうら秋

太抵

湯の底よわの底をけさ秋

蕪村

まの浦めやしきまの浦の秋

書齋

まの浦はまの浦さやう秋の秋

曉堂

朝日や月あつよやま秋とぬ

園更

あまのこころはまの浦の秋



多味好香も圃を破るゝ他はかり

甘菜の香やそららしくおつ日たうり

芭蕉 けせ成美ふよ高うきうすし瓦 喫 糸

桔梗 じききよつ月しとそめる桔梗を 太 我

蔓珠沙陀 花うらうらうとさき枝や蔓珠沙陀 太 我

西瓜 留うらうらう瓜くもくもいけうらう如

唐辛 白き花のおほきこもけうらうらう

豆 豆うらうらう枝をんせうらうらう

錠豆 刀豆やのうらうらう下と花をうらう

蓮實 蓮実好まや各言の傳とそら起う 太 我

蝶 秋の蝶うらうらう花をおおはかり

秋蚊 秋の蚊うらうらううらうは清き世に 喫 糸

鯛 秋の鯛やけのうらうらうと魚もつ 喫 糸

蜻蛉 ひくりにのらぬしもゆめ秋はまぬ

虫 ともけ圃は持をうらうらう人ほは

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

松虫	玉虫	鈴虫	嚙虫
本ちきりよ良人の神は原に死ぬ	玉虫一やは活るゝひねよおの秋	はわきりよまふれ極やくつこし	月宿をちひあゝ下き此
太	太	太	太
太	太	太	太

蛭	冬虫	竈馬	芋虫	藻啼虫
灯は屋のわなを垂れやきりくは	月よと小様をむけはつゝを	つゝなつゝを	芋虫一はものるよまよふよ	おしくや藤よつゝの里に流る
太	太	太	太	太
太	太	太	太	太

蕎麥花

芋花の如く好むやう後何やら
大根も蕎麥も好むやう蕎麥も好む

月をさすよ結ひやすうくけり

昔の麦のむき向ふはあふ不破の面

新蕎麥

新蕎麥のや花はしらもさかふふ

糸帛

まきまき糸のふらふらおろやわらう

わらうらうら大を糸ははさうらう

若烟草

おのまきやうらうら時ををばす

いとらふよ年あふらうらうら

あふらうらうら白あふらうらうら

粟穂

脇うらうらおろり粟穂は

禾

禾の穂はうらうらうらうら

稲花

風流も是はうらうら稲の穂は

稲

うらうら稲は大門のうらうら

稲の穂はうらうらうらうら

田并

稲の穂はうらうらうらうら

お田并やうらうら休るうらうら

落穂

うらうらうらうらうらうら

案山子

おうらうらうらうらうら

吹雪もうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうら

白うらうらうらうらうら

太 我 太 我 太 我 太 我 太 我 太 我

太 我 太 我 太 我 太 我 太 我 太 我

馬

悲〜さ〜ら〜上〜子〜さ〜さ〜く〜小〜女〜砵
 う〜ら〜く〜目〜さ〜く〜あ〜ま〜は〜ま〜あ〜ま
 ち〜ら〜ま〜あ〜ま〜ら〜ま〜さ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま
 初〜ら〜や〜花〜女〜よ〜曲〜さ〜せ〜ら〜く
 初〜ら〜や〜あ〜ま〜目〜さ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま
 初〜ら〜ま〜あ〜ま〜ら〜ま〜さ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま
 け〜ら〜ら〜ら〜あ〜ま〜の〜飯〜を〜ち〜ま〜ま〜さ〜く
 下〜ま〜や〜舟〜入〜実〜様〜く〜舞〜臺〜上
 三〜初〜一〜お〜よ〜う〜初〜ま〜ら〜せ〜の〜下
 初〜ら〜ま〜あ〜ま〜の〜ま〜ま〜あ〜ま〜は〜は
 ち〜ら〜ら〜ら〜信〜徳〜よ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま

太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文

鶉

鳴

小鳥渡

初〜ら〜や〜花〜女〜よ〜曲〜さ〜せ〜ら〜く
 初〜ら〜や〜あ〜ま〜目〜さ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま
 初〜ら〜ま〜あ〜ま〜ら〜ま〜さ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま
 け〜ら〜ら〜ら〜あ〜ま〜の〜飯〜を〜ち〜ま〜ま〜さ〜く
 下〜ま〜や〜舟〜入〜実〜様〜く〜舞〜臺〜上
 三〜初〜一〜お〜よ〜う〜初〜ま〜ら〜せ〜の〜下
 初〜ら〜ま〜あ〜ま〜の〜ま〜ま〜あ〜ま〜は〜は
 ち〜ら〜ら〜ら〜信〜徳〜よ〜く〜あ〜ま〜あ〜ま

太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文
 太 砵
 系 文

鷓鴣

標を百ね金拾ひしぬれくれ 太我

つよ草を多くし百舌もたつるまを 太村

百舌もたつるや照ふあのをらひ 太又

日たつて一羽の勢えんまま裏に 太

はつひあし石のまをうらう 太

このまをよ重のまをや下り集 太我

ゆくたのあしやううう集 太村

土のあしをたつた下り集 太

まはつたうううや麻のま 太我

角の上よ受の月や麻のま 太

う麻村のや戸よ折けたる麻のま 太

鹿

河鹿

下り集

うさそくもたつてくさし麻のま 太

麻のまをたつたまをわらう 太我

あまのたつたまを麻のま 太

あまのたつたまを麻のま 太

あまのたつたまを麻のま 太

あまのたつたまを麻のま 太

九月

重陽

九月のまをたつたまを 太我

重陽のまをたつたまを 太我

茶酒

茶

新茶や通つてはるしうの茶
 子よは戸の柱を冠うや茶の味
 茶は香やむしう茶をかくみ
 又通つては茶作りのせりきうは
 茶は香や山流の松籠る茶
 茶は香や花をう灯をいせは
 茶は香やうの茶をいせは
 西の茶よ若くはんらん茶の時
 二本つてはくまのてん佛
 情さすは茶の味は
 由は茶かくはくはくは

茶村

茶

後月

山をせや戸側まで茶の上
 茶は香の味はくはくはくは
 茶は香の味はくはくはくは
 水上ハるる茶は自ひうれ
 田舎くはくはくはくは
 十とお月はくはくはくは
 ねりくはくはくはくは
 茶は香の味はくはくはくは
 後ハくはくはくはくは
 水はくはくはくはくは
 後にはくはくはくはくは

茶

茶

太

村

茶

茶

茶

紅葉

後の月水さつうゆいしとく
 町倉の古松よも色をばらばら
 おもひしきもあつりし梅も
 初おもふおほくさうり野田の
 おうしつとていふおもひさき
 出あしつとていふおもひさき
 打さつとていふおもひさき
 おもひさきし寺あつはさつおもひ
 おうもほほくさんあつおもひ
 しつおもひさきしつとていふおもひ
 門しつとていふおもひさき

太
 菫
 村
 太
 我

栗 椎 柿

石 栂

老精の魚さつとていふおもひ
 ちつおもひさきしつとていふおもひ
 ちつおもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ
 おもひさきしつとていふおもひ

系
 文
 太
 我
 太
 我
 太
 我

裏枯

うづ枯の森をさへうづこ破破と
うづ枯の森をさへうづこ破破と

太我

芦穂

何よのうづこ枯の森をさへうづこ破破と

太我

松茸

中入よふと茸ふれもや茸の枯
中入よふと茸ふれもや茸の枯

太我

新米

新米のうづこ枯の森をさへうづこ破破と
新米のうづこ枯の森をさへうづこ破破と

太我

新酒

新酒のうづこ枯の森をさへうづこ破破と
新酒のうづこ枯の森をさへうづこ破破と

太我

露時雨

露時雨のうづこ枯の森をさへうづこ破破と
露時雨のうづこ枯の森をさへうづこ破破と

太我

長夜

長夜のうづこ枯の森をさへうづこ破破と
長夜のうづこ枯の森をさへうづこ破破と

太我

秋夜

秋夜のうづこ枯の森をさへうづこ破破と
秋夜のうづこ枯の森をさへうづこ破破と

太我

㊦

△
下
サ
一

